

(1) 笠間地区各校の状況

	学校名	H31 予想規模	課 題	案	学区審議会の意見	地図
小学校	笠間小	18 学級		○笠間中へ進学する区域（笠間小と箱田小の全部、佐城小と南小の一部）を笠間中に併設する。		P 3
	東 小	4 学級	○複式学級の解消 ○クラス替えができない	○東中へ進学する区域（東小の全部、佐城小の一部）を東中に併設する。佐城小の一部が加わることによって人数が増え、東小の複式学級を解消することができる。		
	佐城小	6 学級	○クラス替えができない ○笠間中と東中への分散進学	○佐城小から笠間中に進学する区域を笠間中に併設し、佐城小から東中に進学する区域を東中に併設する。これによって、分散進学を解消することができる。		
	箱田小	6 学級	○クラス替えができない	○笠間中へ進学する区域（笠間小と箱田小の全部、佐城小と南小の一部）を笠間中に併設する。		
	南 小	6 学級	○クラス替えができない ○笠間中と南中への分散進学	○笠間中へ進学する区域（笠間小と箱田小の全部、佐城小と南小の一部）を笠間中に併設する。 ●笠間小の学区である行政区 15 区（下市毛南部）を南小の学区にする。これによって適正規模を確保することができる。 ○検討委員会では、南小の学区を 3 分割し、笠間小・稲田小・宍戸小に統合してはどうかという案が出ていた。	○南小を残してほしい。 ○15 区は笠間小に行く子と南小に行く子が共存している。 ○15 区（下市毛南部）を南小の学区にしてもいいのではないかと。 ○15 区に元々住んでいる人たちは、南小に行くことに抵抗があると思う。 ○来栖保育所近辺は来栖という地名だが、笠間駅前の 14 区の子ども会に所属して笠間小に行っている子が何人かいる。また、14 区から南小に行っている子もいる。	P 3 P 4
	稲田小	12 学級				
中学校				○笠間中へ進学する区域（笠間小と箱田小の全部、佐城小と南小の一部）を笠間中に併設する。		P 3
	笠間中	12 学級		●笠間地区の小中学校全校を笠間中 1 校に併設する。	○1 2 km、1 3 km という距離には無理がある。この案は不可能である。 ○小学校は、育った環境を考えて地域に分散していたほうがいい。 ○中学校は、自転車で通学できる距離がいい。 ○部活を盛んにするためだけに学校規模を大きくするだけでいいのか。 ○部活は中学生にとって大きな位置を占めている。様々な部活から自分で部活を選ぶことができるし、お互いに切磋琢磨することができる。 ○スクールバスの課題が解決できるのであれば、中学校 1 校案にも可能性はある。部活を考えると積極的に考えてもいいのではないかと。 ○小学校は地域に分散した形にして、中学校はバスの基点まで自転車で通えるのであればいいと思う。 ○この案は極論であるが、学区審議会では小学校は分散し、中学校を 1 つにしようという内容に変わってきている。小学校を併設しないなら、この案は別の課題としてとらえたほうがいい。	P 5
	東 中	3 学級	○クラス替えができない	○東中へ進学する区域（東小の全部、佐城小の一部）を東中に併設する。	○併設にしても適正規模にならないのに、なぜ東小中を残すのかという意見もある。極論として中学校は笠間中 1 校でもいいのではないかと。 ○適正規模にはならないが、検討委員会としては地理的に遠いということに配慮して学校を存続せざるを得ないという方針を出した。	P 3
	南 中	3 学級	○クラス替えができない	●笠間駅南側を南中の学区にする。これによって南中は 3 学級から 6 学級になると予想されるが、適正規模にはならない。 ○検討委員会では、南中の学区を 3 分割し、笠間中・稲田中・友部中に統合してはどうかという案が出ていた。		P 6
	稲田中	6 学級	○最小限のクラス替えはできるが、適正規模にはならない		○稲田の場合は、幼稚園から中学校まで同じ地域の子が通うため、ほとんどの顔を知っている。しかし、小さなコミュニティが続いて新しいものとの接触がないと思う。	

※ ○：検討委員会の方針 ●：学区審議会の新たな意見

(2) 友部地区各校の状況

	学校名	H31 予想規模	課 題	学区審議会の意見	地図
小学校	宍戸小	12 学級		<p>◆調整区域（友部駅北側及び南側）について</p> <p>○検討委員会では、クラス替えができない大原小の適正化を考えて、調整区域を大原小の学区にしてはどうかという案を出した。</p> <p>○鴻巣から大原小へ行く道は外灯が少ないし、周りが田んぼなので、子どもたちの安全を考えると不安である。友部小までは民家がたくさんあって安全である。ただ、友部小の場合は、今以上に人数が増えるとプレハブでも建てないと対応できない状況にある。また、今後30人学級になるとさらに学級数が増えることになる。</p> <p>○調整区域から大原小に来ているのは15軒で20人程度である。大原小PTAとしてはもっと大原小に来てほしいが、地元と大原小の両方と付き合いのある家庭は負担が増えるようなので、大原小を選んでもあまりメリットがないところが難しい。</p> <p>○学区の見直しの問題で調整区域ができたが、この調整区域をなくす方向で考えるのか、あるいは残すのかという議論が必要であって、単なる人数調整だけで進めてしまっているのかと思う。</p> <p>○調整区域に関する考え方を1つの方向にまとめるのではなく、友部小に近いところと大原小に近いところで線引きする必要もあるのではないか。</p>	P 7
	友部小	22 学級	○友部中と友部二中への分散進学		
	北川根小	12 学級			
	大原小	6 学級	○クラス替えができない		
	友部二小	12 学級	○友部中と友部二中への分散進学		
中学校	友部中	15 学級			
	友部二中	12 学級			
				<p>◆調整区域（ベリオ・コリナ会区）について</p> <p>○ベリオ・コリナ会区はすべての児童が宍戸小に行くものだと思っていたが、宍戸小と友部二小のいずれかを選択できる調整区域であることを初めて知った。</p> <p>○調整区域として学校を選択できることはいいことだと思うが、北川根小のほうが近いと思うので、北川根小が将来にわたって適正規模であるならば、北川根小に行ってもいいのではないか。</p> <p>○ベリオ・コリナ会区は地域的に大古山なので、行政区域としては宍戸地区になる。したがって、単に距離だけではないと思う。</p>	P 8
				<p>◆分散進学について（友部小・友部二小）</p> <p>○検討委員会では、感情的なものや小学校で積み重ねてきたもの、友人関係やPTAの関係、そして小中併設の推進を図る上で、1つの小学校は同じ中学校に進学できるよう見直したほうがいいのではないかという方針が出された。</p> <p>○今のところ、両小学校の進学先を中学校区で表示する方法以外に案は出ていない。この案をタタキ台にして協議してほしい。</p> <p>○友部小から友部二中に行くのは10人程度で、ほとんどは友部中に行っている。</p> <p>○友部二小は、友部中と友部二中にだいたい半々に行っている。</p> <p>○友部二中は、友部二小と北川根小がほぼ同数、それに友部小の10人程度で構成されている。</p> <p>○友部二中は26年間この区割りでも波風立てずにやってきた。それをあえて変えたとすると、友部中のマンモス化や友部二中の小規模化にもつながりかねないので、あえて課題にするのはどうかと思う。</p>	P 9 P 10

(3) 岩間地区各校の状況

	学校名	H31 予想規模	課 題	学区審議会の意見	地図
小学校	岩間一小	12 学級		<p>○小学校は2校が理想だからといって、岩間二小を無理やり統合してしまうのはどうかと思う。</p> <p>○今見直しをしても、人数が減っていくとまた見直しをすることになる。それなら、最初から小中一貫校にして、人口の減少を見越して3校をまとめておいたほうがいいと思う。</p>	P 11
	岩間二小	6 学級	○クラス替えができない		
	岩間三小	12 学級			
中学校	岩間中	12 学級		<p>○今後、人口の減少が始まった時期に見直しをしたほうがいいと思う。今の時点での見直しはまだ早いと思う。</p> <p>○岩間二小が今後もクラス替えができないまま続いていってしまっているのかという課題がある。それを学区審議会で話し合う必要がある。</p> <p>○二小と三小が統合の対象になったとしても、三小の校舎は2クラス分のキャパシティしかないため、人数が増えると増築するしかなくなる。増築までして、さらに5年後に人数が減少してまた見直しをするのはどうかと思う。</p>	

(4) 小中併設について（学区審議会の意見）

教育委員会が小中併設を推奨するのであれば、いずれかの地区で小中一貫を実践してみて、その効果を評価しながら全体に広げていければスムーズに進むし、住民の納得も得られやすいのではないかと。